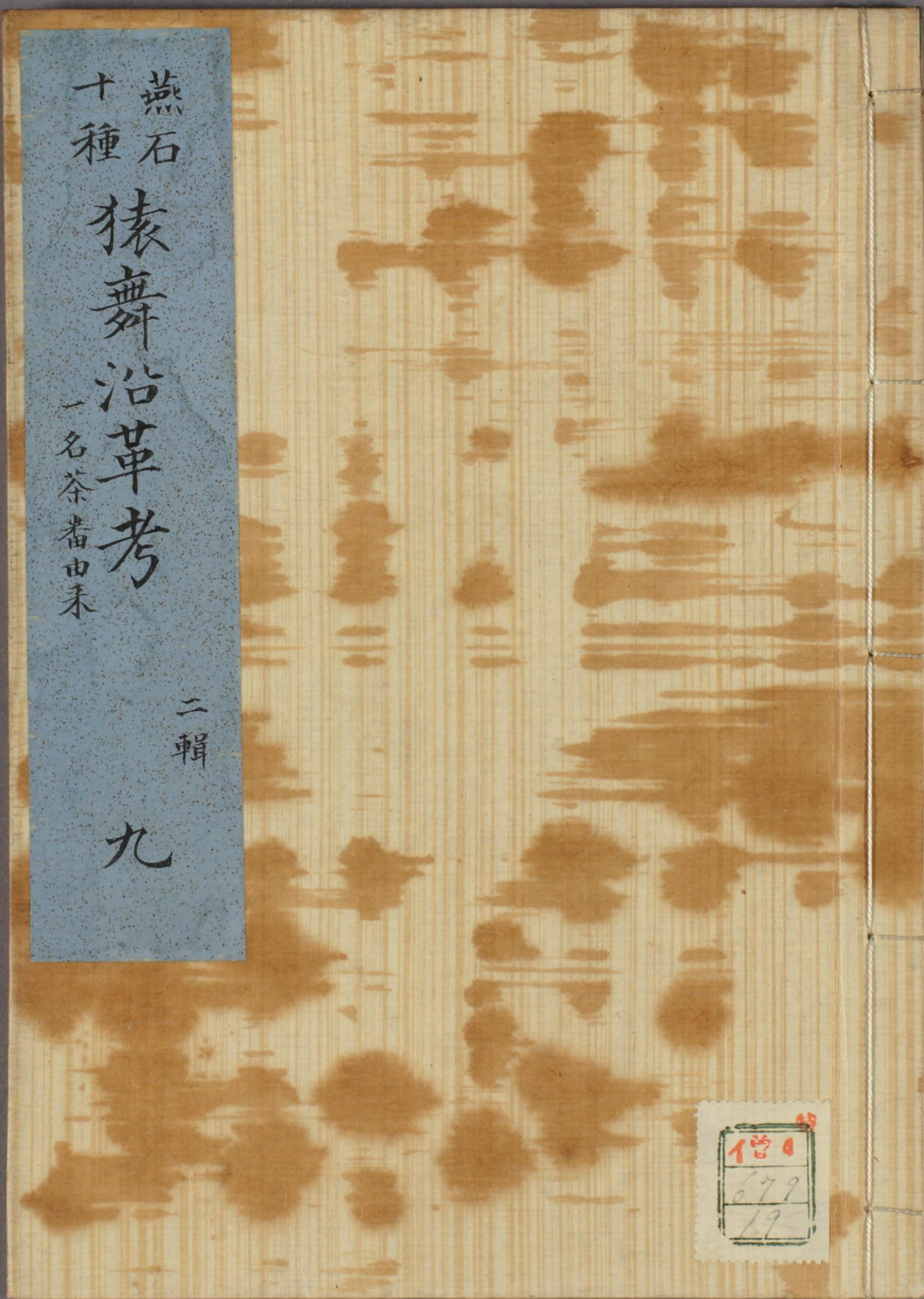
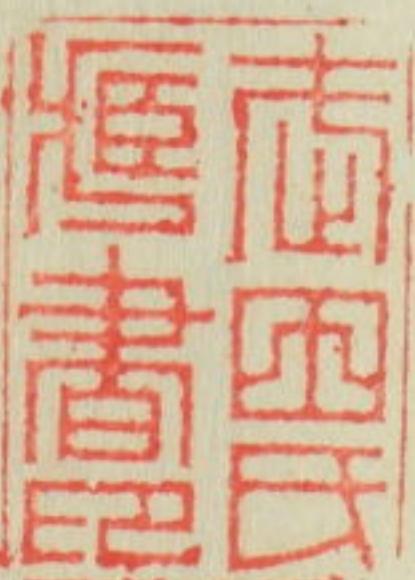


9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8

Japan



川寄重恭識



猿舞沿革考

天照太御神の隱坐於岩屋を細聞く御覽にて八意思氣神社遠慮深謀
 八百萬ノ神共ニ咲ワラキ_{古事記}と仰る如く彼、命比猿女の舞比旌ミクマシシテ樂ヨハシ可咲カシタるも、大御神比御怒りをなぐ更アフる吉例ヨリタシのまゝ、鎮魂祭代ミクマシシテ行スル古俗拾遺コトハツイ小凡鎮魂ミクマシシテ儀者天鉢女命ミクマシシテ遺跡ミクマシシテ天孫本紀ミクマシシテ鎮祭之日猿女君主其神樂ミクマシシテ其アタシ爲スル負觀儀式ミクマシシテ御巫舞說ミクマシシテ次諸御巫猿女舞畢ミクマシシテえに次第ミクマシシテも神祇官雅樂寮神樂次御巫衝ミクマシシテ宇氣ミクマシシテと仰スル御巫ミクマシシテ猿女君主宇受賣ミクマシシテ命ミクマシシテの裔孫比仕ミクマシシテ奉スル神車ミクマシシテ之彼、命比裔ミクマシシテ猿女君比血脈ミクマシシテえがくアタシ他姓ミクマシシテ比人ミクマシシテ猿女君比屋ミクマシシテ賜ミクマシシテ御車ミクマシシテ小仕ミクマシシテすがらミクマシシテあミクマシシテを多ミクマシシテ但孝選准散事官人ミクマシシテりミクマシシテ初ミクマシシテ也ミクマシシテ此御巫の神樂車仕ミクマシシテ奉スル神の御心机ミクマシシテ申スル天皇比大御側ミクマシシテよミクマシシテ奉スル

をり、優とをうへ比約する辭あり。銅屋翁も招の義が死んつて師をたまへり。義と
かくて時世沿ひ草足上代の俳優神樂とあると都く漢藉韓人どもあら参
トキヨウツカハカバタニツヨウ
皇極紀なる八佾舞續紀なる大唐樂百濟樂高麗樂新羅樂度羅樂林邑樂渤海吳樂等五常奉樂
長者傳按頭陪臚鳥菩薩あど尚以外ともいと多き也

尚上宮、厩戸、皇子など西戎の樂ともをもろに作りてあり。拾芥抄上未樂目録の下に
戎より後もとと白帝朝と作らるゝと混を用いらむと中古厩戸皇子と云ふ。他にも多く
ちと聖天樂柳花苑春庭樂秋風樂胡蝶樂など下をも葉作玉子がりをも思ひて
皇朝より雅樂寮大歌所がどを定めらるを今にせよ所謂古樂いと多く出来りてよく
ましく音律曲調りうちれんらもて假令吾づくは左とも勢をも右をもとて
吾声の高く唱もて曲も低くとせむ。やうれともちをたせ来たるもうて徃昔
折りのとての事も久未舞國柄伎立出儻小懸田、儻指節儻筑紫儻諸縣
儻倭舞駿河舞具、鶴神樂催馬樂など比類古少近く今ふ跡く法則曲調
もしくしうぬを鄙先駁。次専らふ雅樂上ふく唐高麗亦皇朝乃新製をのみ
用ひらる世とぞちうりと變更をほもう世初移て足利氏が奏改へしもあら

より穢樂と云ふ一種比舞^{ヒツモト}と云ふて大將軍家比式^{ヒツモト}も又何ふよもに用
らを所謂雅樂ハムアリとてあへ、ゆひ將軍家より穢樂を領ち用ひ、而^{ミキテ}
御定のひととたゞまよはり抑此穢樂^{ヒツモト}のとて禪僧宣作^{ハサカ}が書^シる、翰林胡蘆
集^{ヒツモト}と云ふ^{和事始卷}小大優者比伎^{ヒツ}と奏^{ハサカ}河勝^{カツコ}ノ始まり今此伎をなすも比
皆其後胤^{ヒツモト}を云云村上天皇万様比照太子の事^{ヒツモト}所の申樂延年紀を見
しゆ^{トイヘリ}群臣^{ヒツモト}よ告^{ハサカ}曰く上諸神を敬ひ下方民を安^{ハサカ}申樂よとひも
な^トと^ト則河勝^{カツコ}が遠孫秦氏安^{ハサカ}命^{ハサカ}と重て此伎を興^{ハサカ}と又紀氏^{ハサカ}と氏安^{ハサカ}
女房嬌^{ヒツモト}を有^{ハサカ}ふ二人^{ヒツモト}を起^{ハサカ}日^{ヒツモト}大内比殿前^{ハサカ}席^{ハサカ}天皇^{ヒツモト}平^{ハサカ}六番^{ハサカ}事^{ハサカ}
志^{ハサカ}一^ト日^{ヒツモト}一^ト經^{ハサカ}五^ト日^{ヒツモト}其事^{ハサカ}を袖^{ハサカ}三十三番^{ハサカ}と呼^{ハサカ}積^{ハサカ}爲^{ハサカ}代積^{ハサカ}
翁父^{ヒツモト}亟^{ハサカ}足^{ハサカ}也云々太子神樂比神比字^{ヒツモト}を云け申樂^{ヒツモト}と名づくとわざ^{ヒツモト}和漢王
才國會卷十六藝能部比下遙比條^{ヒツモト} 按謠^{ヒツモト}近世之製以^テ比^{ヒツモト}漢^{ヒツモト}謳歌^{ヒツモト}者
也伶倫本出^{ヒツモト}於聖樂^{ヒツモト}而和^{ヒツモト}十二律^{ヒツモト}用^{ハサカ}數品^{ヒツモト}樂器^{ヒツモト}奏^{ハサカ}之也不容易^{ハサカ}因^{ハサカ}後
贊^{ヒツモト}之^{ヒツモト}以^テ扇^{ヒツモト}記舞謂^{ヒツモト}之猿樂^{ヒツモト}又謂^{ヒツモト}之能^{ヒツモト}或云聖德太子百濟味摩之等^{ヒツモト}

傳來樂加之依神代猿女君樂以笛鼓調扇舞曲新製衣三鼓爲舞伎謡始製衣謡舞樂秦川勝從而製衣之住吉大神更感之請奏祭場大子重製衣三番前製衣三十三番後製神請三番名之爲猿樂云々猿樂或謂依猿女君之樂或見猿以扇舞踏作之故名猿樂並非也凡物似真者称大_{ト大筑波集}_{大坂之類}是亦比正樂則野鄙故称猿樂耳トヨトミニヤ御子猿樂を作起先トヨトミニヤと曰うをわらひの事トヨトミニヤを塞今れせの猿樂能を古させより在るむわき後世人が诬罔トヨトミニヤをもいふと云ふ事正史実錄トヨトミニヤに見えり由なへは所謂雅樂カともの中ふ歎皇子トヨトミニヤを作り給ふと云すあらうをそひの雅樂を作りあらも皇子トヨトミニヤ再真樂を混ミタガ舞業トヨトミニヤをばいがハシメ起製トヨトミニヤあべき又代トヨトミニヤの天皇トヨトミニヤを次の御遊ミスサセも真樂トヨトミニヤど時トヨトミニヤもびてそのをせりはつまよき脣モモも見えりれど猶積ミタガかど舞業トヨトミニヤを用ひらんトヨトミニヤふ事トヨトミニヤは教トヨトミニヤふ見トヨトミニヤくぬをいふをいふもトヨトミニヤ小廄トヨトミニヤ皇子トヨトミニヤ古乐トヨトミニヤを作りそトヨトミニヤあらとトヨトミニヤ塗トヨトミニヤ且トヨトミニヤ名トヨトミニヤども新猿樂記トヨトミニヤ兄トヨトミニヤ師トヨトミニヤ保儒舞トヨトミニヤ蝦濂舍人トヨトミニヤあとトヨトミニヤふ似通ミタガて固トヨトミニヤ類トヨトミニヤの舞事トヨトミニヤねりもトヨトミニヤ推度トヨトミニヤふほりもトヨトミニヤ宴トヨトミニヤ廄戸太子トヨトミニヤ作トヨトミニヤしゆトヨトミニヤならむ

までは下よもよふ能の上る有る。一ゆう一石をほ覽ざらきつて、徒然庵
作歩きうる清涼殿よりゆ能十三番あると又古ニ日よりあく後朝よりありてうひすら
せりゆ所望よりゆ能九番あるとどやうふ朝庭より拂りて行ひる。一ゆうて
せんれど尚すまづき事比折を必雅樂をとれ。一ゆうてあすかすりともあらず。今世も
をもさる猿樂と書ひてサルマヒと訓もべ。師院は伊勢風土記申樂をサルマヒと訓もを例と
する。かく訓もべといももく。ハカリコトハ。あら様女舞の畠^{カタ}辞^{シテ}うれ岩戸^{イシド}比前^{ヒマツ}神懸^{カミガリ}して胸乳^{モモ}を掛け端^{ハタケ}とぞあ
寐^{スル}ゆゑ^{ヨリ}アハ比猿^{アヒモノ}。最^{イト}可笑^{ヲカシ}うる。左ふ宇受賣^{ウツメ}命^{ミコト}を御巫^{ミツコト}起原^{モト}
うて直^{タチ}ふ猿女君^{アヒモノノヒメ}、祖^{トモ}申^メ。其舞^{アヒ}を猿女舞^{アヒヌメ}サルガヒワザ^{トモ}唱^{ハセ}。來^{アリ}
もふ合^ハきて俳優^{ハギョウ}を雜伎如^{シテ}獮猴^{アヒモノ}之状^{ハタチ}と唐藉^{タカシマ}ひつて獮猴^{アヒモノ}乃字^{ハシ}の因^{ハシ}て猿樂比文
字^{ハシ}を借用^{ハシ}いて^{ハシ}もよ^{ハシ}サルガク^{トモ}唱^{ハセ}。アリモ^{ハシ}どう^{ハシ}訓^{ハシ}も^{ハシ}學^{ハシ}字^{ハシ}も^{ハシ}文字^{ハシ}も^{ハシ}。^{ハシ}と謂^{ハシ}湯^{ハシ}桶^{ハシ}も^{ハシ}と^{ハシ}物^{ハシ}を
されど樂と訓^{ハシ}も^{ハシ}いづ^{ハシ}。ざぬな^{ハシ}の聲^{ハシ}を彷彿^{ハシ}麻比^{ハシ}と訓^{ハシ}。例^{ハシ}は行^{ハシ}。アリモ^{ハシ}猿^{アヒ}と^{ハシ}事^{ハシ}
も源氏物語乙女^{ハシ}は卷^{ハシ}よ^{ハシ}う^{ハシ}かゆ^{ハシ}。く^{ハシ}び^{ハシ}。余^{ハシ}ま^{ハシ}け^{ハシ}。アリ^{ハシ}しなど^{ハシ}されん
よ^{ハシ}ゆ^{ハシ}して精吟日記^{ハシ}。中天下^{ハシ}は^{ハシ}ふ^{ハシ}と^{ハシ}を^{ハシ}い^{ハシ}の^{ハシ}しら^{ハシ}を^{ハシ}も^{ハシ}と^{ハシ}又枕草總^{ハシ}

たゞ却て日本語の事を一語の程の事中は圓白殿の通のちども殿の事ハシマニふと事ふ
ノミシテコトシヒテ又ヤツモシムニトロリシモシテシテガフテラシモ又たと
はうちさふらひとのよしりが本のゆゑをわいみあれどいもアリテ又これを今を
シテ花や死なむる事などアリ大鏡卷六及頬大納
シモトモおもせりなすされどみすもアリゲドアドリ事物どもふある見
名を原始をさかまひて事より出でてもあらひはがひ同音相通ち一用い
えどもえいとも活用ハタク一をたまるとり事をアドスレをみされケルジハ
ハサレとも用ひて下學集下卷怨藝門より左禮戲義とくも皆猿舞箇ふ
叶ハシマニサレザレとソリ洞今もなまか旅を傳ハシマニシヤレとソリモ 漢文字ハ洒落を換てシヤ
思ふ人もあれどこそをもあを深くまで寒うミサレ吊シヤレある幸小洒落の音のシヤラクとト
モモ義もろび通字もあをあれ竹子石あとの雨風より濡れて何となリ脚筋の織けあくちう
シヤラセもとソリバサラサレゝもうそ戯の字め義と異あれと御定シヤレならをどつまきりモサ
シヤレ相向しきを思へばいづる石竹をうして雨風より濡れよみがはらりて洒落ありとシモトモモセ
うて後カラサレシヤレ再び涙をチヤリチヤルあどりじんを第ハシマニチヤカスあと
り俗語も今も滌々と潤る方丈の洞ののみ用ふサセビド言義をりひりてゆ

をシヤレモノとソリ而モリチヤルと同ド意なるをシヤレと所謂猿樂ア
事ト今以能の猿樂を除キフタツ中古すモ二様ア分キ在モ故ムトソト一教と臨時ソトの當り
て像の思ひ巧もハ業ハシマニ一つ其ソト狂ハシマニなぞふのりも今比猿樂座アとメ
ハシマニハシマニ曲を次ハシマニ論ハシマニを見ミ
シモ村上御製比辨散樂本朝文
辨卷三ハ同散樂之興ハシマニ其來ハシマニ尚シ矣云ハシマニ仰ハシマニ尋ハシマニ前日伎歌
俯察ハシマニ當今之風俗不ハシマニ周禮旋人之所學亦殊ハシマニ漢典遠夷之所獻云ハシマニと新韓鶴
世羅國ハシマニあどり伎狀ハシマニをも舉ハシマニ扇の貞觀儀式ハシマニ相撲節儀ハシマニの下ハシマニ散樂人冊人四列人夏
猿樂を散樂と文字事物紀原樂舞声歌之部ハシマニ教坊ハシマニ教坊の下ハシマニ東西使班部
オニ九教坊使の下ハシマニ出其外唐籍ハシマニ有ハシマニア
かとひよて家綱行綱とソリ陪從ハシマニをも多と多反比猿樂ども形ハシマニ宇治拾遺卷五
少傳ハシマニ事とまた同書卷十幹白川中侍陸陵國司師綱被下ハシマニ山林坊贊綱とソ
猿樂傳ハシマニ下ハシマニ字拾遺卷五十九ハシマニ寺僧ハシマニ田樂ハシマニ樂ハシマニ樂ハシマニ和ハシマニ却
き又古事記卷一久我大相國被申ハシマニ猿樂ナドコソ給酒ハシマニハイテトイフハ候ハシマニ又卷四
散樂ハシマニ共二具シタリケルガ本奈良法師テテ寐覺の紀ハシマニモウハシマニ又東鑑ハシマニ建久五年

壬戌二日の下其後於舟中興遊如掉一葉參猿樂小法師中太丸參施藝アゲハ_{上下解}又
今昔物語旧本卷廿八右近馬場殿上人種合詔茅世五アシカモアシカ禱アシカモアシカ猿樂ノヤウナルヲ云々やアシカ禁
秘印抄中卷可遠凡賤幸之餘より有藝者依其事近アシカ召アシカ事近代多シ如寛平遺
誠不可然况如猿樂アシカ奈庭上可止事也アシカ猿樂常輔神主アシカ梅窓筆記アシカ此文を舉てトカセ玉ヒシ
乱舞アシカモノハナカリシナリと云アシカ義經紀卷五靜アシカ野アシカ捨アシカ事は多
実アシカ事なり尚次アシカ瑞アシカ下アシカ迎アシカの國アシカよりまことに猿樂などアシカ新猿樂紀アシカ水上專女山背大
即千秋万歲飽暖鼓蟠螭舞福廣聖妙高尼形勾當アシカ都猿樂アシカ熊鳴呼
之詞アシカと爲アシカ戲アシカうたられ年アシカとアシカ此紀アシカお國アシカより因アシカももだらりアシカをアシカ事アシカどもを
あるを以アシカもすれ業アシカなるそよ專アシカと業アシカすアシカ者アシカもりともアシカ事アシカよ書アシカ燈アシカちるアシカと
さく今何うる猿樂業アシカものなアシカても時アシカふよりて乃アシカとアシカと今昔
物語卷二十八旧本大藏大夫紀助アシカ郎等アシカ唇被アシカ味アシカ龜語アシカ世三の下アシカ世人全毛
下アシカモ由先カラ虚欠アシカレテ猿樂ニ然ヤウナラム危キ戯アシカ事アシカ可止アシカシヤ宇治拾遺卷
十四高階彼平アシカが舟入道竿アシカ仍比事アシカ十アシカよたゞらはアシカもとアシカアシカ

をりしゆうそんの物語よりへゆくも事よりてちとらむとまだくきふ笑ひ
されば今昔卷二十五より平入道まゝ源平盛衰記ノ猿樂と申すを可矣」
き奉りを
ひつてをして人を笑へも「竹をぞうす」平治物語参考本卷ニ信頼降参の條
太官左大臣伊通ノ聞給ヒテ一日猿樂二鼻ヲカクト云世俗ノ諺コソ有ニヤ
東鑑卷廿五寛
元元年九月九日以下ノ將軍家入御佐渡前司基綱大倉家云々人々及^ア猿樂同
書卷三寛元二年五月十日以下小於^テ將軍御方有^リ御酒宴大藏權少輔朝廣
能登前司光村和泉前司行方佐渡力郎左衛門尉基隆等答辭^ス猿樂云々^ト
また卷四建長二年六月十九日將軍家念逍遙造泉殿給云く和泉前司行方
以下及猿樂と見え源氏物語弄花抄^ヨ乙女卷注猿樂をいふても有^リと心ふ思ひ入
ぬ事をもろもろひりきのみなすとあどけらん何人よまを其時よ隠みそ所謂今め
シやレハ等^トき奉を言ひ戯^ス天子^ト秀燈新話卷二天台詔隱錄少優人歎樂語と云ふ
詮^ト優人^ハ怜優之人也樂語猶^ニ今^ハ致語之辭^ト云^ク
をも思ひ上件建暦比頃ト^トて其舞小字^ヲつき其人よ黨定まりて漸く今比能
合す^ト上件建暦比頃ト^トて其舞小字^ヲつき其人よ黨定まりて漸く今比能
とひものも且^シ似^トひひをもさ^ト北山歎行幸記^ト應永十五年三月十五日夜入

て宗賢門院へうちへ行幸あるとあは樂をもつてとせらんとえひりん望
ばもれよりどもくと己が能のむらほへておもとふぞとぞ様樂能の物
ふええや始まるべき海人藻芥下巻ふ勧進田樂様樂棧敷ニ出ル事前々一官
一職ニ至ル程ノ人不望其外然而近代相政歟初テ見物セシメ給門跡ニハ梶井門主
同ク令出給其後公家ノ輩并諸門跡見物連綿ナリゆ尺素往来安乃勧進
辛度新度之田樂和列江列之様樂各丁獨所能以殊見物之志ハ棧資四五間有簡
ア被塞くはまた梅窓葉記下巻小三宝院満湯准后記を引く應永廿四年正月
十三日卷簾覽様樂トアルハ今ノ乱舞ニテ此記ニレバ貴尊モ簾ヲタレズ見タマ
ヒシナリと仰る皆今比様樂能を以てゆて因よレ様樂舞業を能といはずハ既く
三代実錄卷セヨ新伎教樂競そ其能と見え
西宮紀相模の象相模アテ能優一籌あるども能優あるどりとも今比能の奉りもあらず雜伎を
ソムズと文安の田樂やむか田樂をも能とつてをりて教習するアテ能不能はやくおのづかちある
限をつゝしなどいとくへ龜とリモ同ト奉のどきを度もそそりと泊とたゞて田樂能様樂能とし
うぶ能とふりと様樂の事とやるもあらぬとあらむ

文部省圖考卷之三

古く例あるを因舞やびて因樂比古き塙河院の承長元年より大江匡房卿洛陽因樂元
刑をといひもよ何余をうらうづきをとせらむ。こうと不和其所一起初自問里及於公卿と記すを古事記卷ア大
田樂奉ま。一院殿と人因樂比喩を舉く如琴日々夜々在之所々諸院諸宮又殿園白
饗書鄉藏人所已下鄉音々村々因樂或被召貴所或參詣ス神社云々あどせ中勲スとぞ
誤

古く例ある田舞やびて田樂也古き堀河院の承暦元年、大江匡房卿洛陽田樂記
刑などといひよけ余古うらうづき
をとせらも、うちも不知其所起初首問里及於之卿と記すを古事記卷一
田樂事ま、一院殿と人田樂比條を舉ぐ如歎、日々夜々在々所々諸院諸宮又殿園内
藏人所、已下鄉々村々田樂或被召貴所、或参詣神社云々あどせ、中勅スモと
ちやぢ、狀を載せんをあむ今昔物語旧卷二十八近江国矢馳郡司堂供養田樂語
南東鑑三寛元三年八月十六日以下、神子神田樂馬場ノ儀ホ如常ノ卷三宝治元
年九月十六日の下、相模ノ國毛利ノ庄山中ニ有怪異等、毎夜田樂、粧之由土民等言上
き、文安田樂能記小文安元年六月廿九日實意大僧正比坊ヲと與行の事などもり、
て猿樂と相並べ行ハシを缺ク、舞業を專シテとて取ハシふもク今比せハシ庫ク
諸社の祭儀ハどハシみ残クとて尋常ノと絶て用ひらハシ常陸國誌ノ久慈郡
金砂山ニ有テ神祠、其神土人以テ時ヲ祭レ之ヲ七十二年ニ有ク一大祭、其日有リ田樂ヲ爲種シ俗
俗舞雜伎ヲ一名曰ラ田樂ト也按ス田樂者古昔大行ハシ於世、近時人失ス其傳ヲ故ニ余國無シ有ス
聞ク唯本国民間相傳テ有ス、レ因田耕華卷四田樂法師の應昔ハ盛ナリし旨ハ太平記ノ見ム今
綰ム春日祭の時ハシをよりをよりざれど今も水戸ミドリ此ミの村ハシ

て年々の神事を行ふ又三十年一度比々祭は時を以てよりを盡すとす。ととらのまゝ六國よりて
ソラモ又和琴始卷立する田樂の條より常陸總の文を舉へる
殊ふ其の能と云ふ者も残在ふ由を。んど金國無有所國と云ふと無替は況なむを矣。和
比春日社は薪の施と云ふ時より田樂は事ひも風俗文選卷二と云ふとのよ靈
堂比樂を行ふと云ふ南大門よりて薪の施をもども七度また使ふ四度比樂
樂を先んじて頭を仰ぐ幣田樂はビジドロ注即南都賊サニラスリと云ふ又比嚴坂奉山王祭モウヒンも
家要畧記卷四小日吉芝田樂根本事と云ふ條行り又山王祭礼記より月能桂記より
冒テ末日の祭は田樂法師カミアヤラトル奉事あどを挙げ又江戸王子權現七月廿二日
比祭事ト云ふ田樂は舞行金輪寺の若法師もら浅草三社權現三月十七日及八月十五日
比祭事モチツ千住の童行モチツをか十人著トキモ代業マサニを掌ハサフつとも云
此を重恭も目撃して記置モチツ者行モチツうきは余
國々もなず有むすべく田樂は事及び其舞モチツ姿モチツ見えが限ホカ
ち別論モチツ事モチツを比行モチツを対する關係モチツが事モチツ然モチツも然モチツも併優モチツを以モチツて
を黙止モクシ行モチツべき事モチツもわら翁オガ大概を以モチツて論モチツ了モチツ
がまごく朝庭の雅樂モトスチより一派の舞モチツと云樂あど鄙劣モヤシゲたゞばづつ

事物

ミダリガハニキ

事より多くなりもて來るゝかく根難鄙劣づどもとて取ててやん
必も法則曲節たりき幸能も又筑紫華三味線胡弓などり絃声小曲調を合
規則を定めく舞合奏をどもをもて廻るの嚴重なる制と近がきをいと乃様
爲きされどきよし叶べても妝をども源とする様樂能ち凡人の締ふが事際
すらの雅樂と同等トドシナニかうよりてゆき放能狂言とをうき方ヒあるをも
此狂言とひとも其作をばげえを能のいと詰屈な規矩法則の域を出でる見る
ふふ心や角しき舞態の間をもるども己がぞ思ひ設け放る業なれを法則より
曲調をかもう様樂比衣調度など有の廻くとを用ひはせあひて大名うど
あどきや角を実同ナシカ縫多業ナリ色もうそん将今世となつて
新より作らどセヌ古きの傳りて狂言化すとのふどを典拏とこそ汎めを法則より
をすもじ語り一手も舞違トドとくゆづまうと廻く曲節小うもを法則より
らまえ恒内ふ入まで能とゆき物とを咸ゆく先お然れを吾が師の班優江元モト
起と樂一きが余まふ坐つも歌ひうひほゞ金引ふ立ても舞ふ舞ふすれば自

シふ音律をもて和一調もあらふ國一を後世よりおれ奉儀を志もて徳を
辛うて其シ歌舞を合ひととする故に眞正官風のをうきはを失ひて其
邊の舞の狀を見ゆる人を無もありもむらややが見聞するうとて憂苦此
不正たどと思ひ向くをやかくいもどとは律呂は旨を知らばぬ形をあとりも有
るをと律呂もあづから山謡ひ舞ふ上よ備もあわふあらむを辛うて定免おこす
歌舞を甚しき合をもふあらうをあらといたまうらさふ事ひと近き世様樂の
よき徳者に變りてよくとめすれと音調の音をもを笛鼓あらの事すれどもゆき聲のみして清寂
ノ調のとくのとくと頬づきをするやくもととひれを被男呼謡をあそ笛鼓の用ひをも音が調乃
谐をすきゆきも調をもすく食奏もりひきをもくもくと能り狂言ども哥舞妓どもをきく
矣よさぶ事あり
何比歌えれ舞をいもよそ化業其をもを學ぶとすふよと誠の道は宜一き際
びどく已先て多くものとむとうゆふるうと其時すと間少樂一きふーをうき
事より更に有ふ事なくと勞煩一きかとどもなりもうもくを古比様ど
業を叶ふあきものども都ふ有事なきをいふせもとどもむ抑上代の神樂供
優まく中古比様樂業はとみふ餘も叶ひ今世人のあきく音もとをう

某より好る品を景物の備セリ。どひもてゆきと黒々琴箏は音も
加弓入を歌舞妓俳優の聲ばじま。斯一主人よりもけ夜の茶番と行
ふすとてとくも。アドリヒムはくふ取へるが也ともり是も行る
づ事。そく能優者あらびてもする事ども。人も思案ざふ。まも琳ぞ
能もさと今世専ら能るの種。ありて狂言茶番立方茶番又立方とぞりも
口上茶番金物茶番挿茶番抑掛茶番又いぢり碑茶番あどり者うとを
山を島々器賤食物何より。景物とり。あを並く景色を表て其品の景
物比用法も。山。二段返。三段返。因え方など。類アヒト。業アヒト
ある人を。又歌りも。題詠とて行はざく。其とみる大概を題を定め其
よりて趣向を求め。或も寄行。行ふ行も。行ふ行を経たと。種
子定め其業と。うる人。孔子をりて題を配。額つ車。探題といつて。ふ仰。を
かく。業のせふ心うづりて。たゞ。と茶番仕あどり。名目アヒト。それ
能優ふ用ふ。金き。品物ども作り。置きて。今。借。あどする者。茶番狂言傳。茶
番狂言傳。

類其事。初山端。身を法とす。き書。茶番早合點と。各。日待。何まちえ
呼び集。酒飲。物食。障をうぶん。と。業を没。ばく。少をな。を
ふ多。少。業は。され。痛。居。き。と。更。あり。物。讀。事。識。も。人。限。と。と
痛。居。は。は。と。思。鄙。一。次。言。し。詫。も。も。と。鳴。呼。た。と。人。食。思。
を。ゆ。心。高。き。事。と。沙石集。卷七。上。小。片。卷ニ。コガマシキ事。ヲ。アツムル
心賢キ道。ニ。レトナリ。鳴呼。ガマシキ事。ハ。一旦。人。ワヅラヒ。テ。不。バカリナリ。世間
ノ。鳴呼。ガマシキ事。故。ニ。カロシメラル。事。ハ。罪障。ノ。残。ル。因縁。ナリ。又。コノ物。ハ。多。分。正
直。ナリ。タ。思。フ。マ。ニ。イ。ヒ。フル。ヒ。色。代。モ。ナ。ク。ツラ。フ。心。ナ。キ。故。ナリ。是。ニ。ヨ。リ。テ。人。ニ。カロシメ
イヤシメラル。金剛般若經云。此。世。三。人。ニ。カロシメイヤシメラル。レバ。先。世。ノ。罪。業。キ。エ。テ。菩提ヲ
得ルト。トケリ。古人。ノ。德。ヲ。カ。シ。セル。コ。ノ。意。ナル。ベ。シ。と。ソ。ラ。ガ。ト。く。ま。新。猿。樂。記。猿。樂。ミ。熊。嘯。碑
鴨。呼。來。朝。自。鳥。解。頤。之。觀。ト。を。と。づ。御。ノ。く。痛。ア。リ。と。見。ゆ。る。ぞ。孔。子。も。所。謂。其。愚。も。不
あ。ど。も。の。ま。ト。マ。可。及。は。意。リ。申。く。心。底。も。も。じ。あ。も。う。き。事。な。く。く。此。こ。も。を。思。ひ。没。
も。先。頬。を。探。と。日。を。定。某。日。を。何。を。ろ。と。出。あ。も。い。ふ。と。ば。可。笑。ト。う。ら。む。樂。

と人も思ふらしと取らるきすゑを批ううど身のる景物をとて出むといひ
朝の心比内の樂一さ其日少すゆき其趣をとて達はず言ひり一車をも
しててうかと思ひ一心比外よ仕損ハシナシどく亦見く人目するあ不可笑
とぞ思ふうなまうとぞ爲ぐ人見物も心の中などみ和らき世のつるの
曲クギ一き朝夕比勤れいとびあども思ひもすすちみすけてもうが樂
しむ間を詰尼ホド小威儀正カタチ雅樂カタチ也開聞カツミも猥劣ミダリガ一き淫戯カブキ
の舞カタチをとどきうきともぬづきふ琳カタチ故宇受賣カタチ命の猿女舞カタチ中古のさる
うひきカタチみゆけのこそを琳カタチ能優カタチ風カタチを失む猿カタチもととくに形カタチとく然カタチ
てこむ宝承享保カタチの近カタチきもとを起カタチめんと其カタチとくなまく女カタチ車カタチ也と見申ふ
猿カタチび態カタチ既カタチ中古カタチちから一車カタチも宇治拾遺カタチをも陪從行カタチ細脛カタチ
高く招カタチと立カタチ化學カタチび一色も猿樂カタチ新猿樂紀カタチ名目カタチ氣カタチ作カタチ定設カタチ顎カタチ
もとカタチ臨時カタチで思カタチ案カタチつ今比狂言カタチ茶番カタチも俄カタチども類カタチもと似カタチる
是カタチ是カタチ更カタチもいと今昔物語カタチ左京大夫舟異カタチ名居カタチ也立カタチ宇治拾遺卷カタチを
重尹右ハ頭カタチ中將源カタチ顯基カタチ朝臣等也云カタチ右カタチ方屋カタチヨリ出タル者アリ見レバ

小左京大夫某カタチ人比色青きを歟カタチ人青経カタチの君カタチとすカタチ天皇の六借カタチ
まカタチふりて此後再青経カタチトカタチはむ人カタチ酒肴萬カタチあど出カタチせカタチ賤カタチセカタチもと起
清カタチ一處カタチ堀川の通大臣カタチまカタチ中將カタチもカタチおもやカタチ足カタチ志カタチ彼青経カタチ九カタチ何カタチ
行くカタチと失言カタチ庵カタチよりカタチ起カタチ清カタチの賤カタチ一車カタチも車カタチとカタチる條カタチ堀河カタチ
中將カタチ禪カタチノナヨカタチカニ微妙カタチキ裾カタチヨリ青キ出カタチ御カタチシテ指貫カタチモ青キ色カタチノ指貫カタチ
著カタチ隨身三人カタチ皆青キ狩衣袴カタチ着カタチセタリ一人カタチニ青ク綵カタチ折敷カタチ青姿カタチ
盤カタチ二宿カタチラ盛カタチテ居タルラ捧カタチサセタリ一人カタチニ青瓷カタチ瓶カタチ二酒カタチ入カタチテ青キ薄様カタチ以カタチテ口カタチ
裏カタチ持カタチタリ一人カタチニ青キ竹カタチ枝カタチニ青キ小鳥立カタチ六カタチ許カタチ付カタチテ持カタチタリ女等カタチ
敵上カタチロヨリ持次ギテ敵上カタチ前参カタチレバ敵上カタチ人共カタチ見カタチテ皆カタチ諸音カタチ二咲カタチ皇カタチ事
愕カタチタシと見カタチ元カタチ時カタチ村上天皇カタチあカタチ同一書卷カタチ右近馬場敵上カタチ人種合カタチ詔弟サ立カタチ
今昔後一條院天皇カタチ御代二敵上カタチ藏人有カタチ限負カタチ尽カタチシテ方カタチ分カタチテ種合カタチ為カタチ
ル莫有カタチ二人カタチ頭カタチ左右カタチ首カタチシテ各カタチ分カタチテケリ其頭カタチハ左カタチハ頭カタチ辨カタチ印本小藤原カタチ

けんもと鳥あどさまりとをあわへてくれり。くせらきらきとござとあと
しきはやふを非をうそとみよと新院比比勢人のまねをせがんあくをうじ
みゆうゆう月を花ふのとくやはやて法皇比御遠アリすゆる上達部のむと
をくはくをうそとすとくきゆくくよもえをもとあくもくらきこれむと源氏
比物語の心よく行をもうめりを以ふる箱。金刷樹のすぐ入く五葉比枝の付
うり又三院よりれうらばく梅のちよとくふ枝ふ付などこれもいとさくやう
取事どもかねひ有るふと見えどもあんどりづきも今世比茶番ふわく
ゆく。汝石集巻六末アリ先年ノ比何物ノ云出レタリケルニヤ相手ヲ孔子取テ事ラニ
相手引出物ヲセバ時ノ横災ヲマスガルベント云事京田舎ニ普クソソ沙汰アリテカニツ
カタニモ此車アリケルニヤ云くとひて御所の相手引出物もとせる幸なき者相手よなうて
おう妻の謀ふうて引出物の用途をもゆくも肉をひく
銀ノ折敷ニ金ノ橋ヲツクラセテコト。シカラヌヤウニ紙ニツニ懷中シテ手ニ色々引出
物ドモケリイカニモ某ハ上ノ脚相手ニ奉テ其用意アルカト傍臣共向ケレバ争イカ用
意仕ラサラント云イカバカリノ事カシ出スペキトテ目ヒキ鼻引キカホソバメテゾオカシケニ

思ケル上ニモヨニカタハライタキ事思食タル氣色ナリケリ既ニフトコロヨリ紙ニ裸タルモノヲ
トリ出スヲ見テサセル事アラレト思ヒテ餘ノカタハライタサニ諸人面ヲウツブセケリサテ御前アマリ
置タル物ヲヒキヒロゲテ見給ヘバ銀ノ折敷ニ金ノ橋ヲ置キタリ心モオヨバズ作リタリケリ
星ヲ見テ皆目ヲ驚カシ諸人ニガリテゾ見エケル云くサルホドニ返リ引出物トテ紙一枚ヲ給
亢都近キ庄ノ千石バカリナルヲ給テ高サカヘテイヨリ奉公仕リ重不テ御領モ預リ方ニ榮
花目出タクアリケルと今世の茶番よりも彼某をよき趣向をばとぞやると後言もふが思をなす珍ら
ある事ども巧み也ヨミ美き品也うきうき景物ふとを出とふたすとを先ふ思ひおとせむ
うる類ひをもへて鼻あらわしもせりもせり之が故相手引手物の事も東鑑巻建長二年
四月四日下ア於幕府有御勝負事一人々参進等如前左馬權頭尾張前
司武藏守秋田城介著坐面々及合手引出物此間兵衛太郎光政等有喧嘩
以引出物投合手仍テ満呴興宴頗醒畢とて上教うるも持たうれ
ノも事初未達く増鏡をまわす事とうちと同じ仕法ときこのサマ
ツモ用立とすれどこと事どもいき處もさうも沙石集よ相手をれよ小とれあど之家
もとあふ事とすれどこと事どもいき處りもさうも沙石集よ相手をれよ小とれあど之家

まのふ仰あおひらむかくと太閤紀卷の十五秀吉の黒板くろいたのほ出立と江遊真まことと
之を承うける文禄三年六月廿八日にじやの事也ふ此烟このたばこをもちて作つくつて所よ
かたて此屋旅館このやりょかんをいふゆも麻相まじめいとある此行このこう人ひとはまわまわをたりて
かく名なをす。歴史又また心こころをす。歴みたどひつて長陣ながぢの房ぶを補ほひすまひ
形かたちをゆ出立ゆでだて柿唯かきのみをせすれつらへらう。もの黒き綿わたやゆ肩かた小物ごもの味あじ
れぬぬれずれりりと有あハ御ご商人しんじやうよそぎよそぎ所ところ所ところてつまつま。有あなを
多く。あち。丹波守内言秀勝おほしゆ織田常真つねま公加賀大納言會津忠三郎氏卿うじきやう三枝左
衛門有樂ゆうらく老有馬中勢なかぜ印前田反そと御ご法印ほうじんあとあとなり。右うより
蔣田權佐くわだたけすけふうと茶屋ぢやの亭ていをすと二上にじやう二郎にろうをす。一ノ瀬いのせゆかどど。
も僧そうももづき様ようつうひ種たねくわ。の出立ゆでだり也。旅館りょかん比亭ひていをすと
蔣田權佐くわだたけすけふうと茶屋ぢやの亭ていをすと二上にじやう二郎にろうをす。一ノ瀬いのせゆかどど。
ももづき時ときよ臨のぞ矣や。業わざもと狂言きょうげん茶番ぢやばんの類たぐいとりとり。北野きたのの大茶湯おおぢやとり事こと北野きたの
渾号ふんごうを然しか在あた。茶番ぢやばんと名なすとと。ととああとと邊へき事ことななをす。ざゆと
寺同じよきされ業わざの中なか古いすと上あざゆと持もすれれいととを思おもひひといい。拙たく
方かた下くだ賤せんの戲ぎ事こととも落おちく失うしなくく、浮うきよりりすととととかかふ事ことも

悉皆君と臣は中を和へ偕ふより出立ふもとより我が古代の事
うひき西戎人の所謂滑稽比趣を得て心を淳千髪とす有人西京
襍記卷四京北有古生者云善詫謾三千石隨以諸譯皆握其權要而得其歡喜云京師至今
京師至今俳戲皆称古猿曹と云を見るを最も古生と云ふものも少しあるが人多し
あた豐臣太閤の侍者岸瓈里に某なじをど上とそりて人々必を宣しく
頑魯なる中自ら和谐がよし無てと有るまき事と大鏡小巻大
き延長帝つねふあみとぞあそびゆく事と其般もやうどちたる余を
物といふうおとけゝまづきふつまことも人を物といひよきされを大事
國うんうをなりとぞあそせ事ありまじそれさる事めぐらふとよ頑魯と
ぎよげんはれも仁義礼智信も正とぞおももらむとよもをもれをもれを
義經朝活も宣き中自らは滑稽をば備らきふもと贋あざ
れを朝夕に起ふ一もこれつね比舉動も容躊躇行となく先を

たくえやぎふはーく言語の和谐いれたるをイからひよき
赤闕見ゆる物レヒシモ易くしゆゆる。憩の隙を伺ふ魔鬼魅も其家よ
入らむ事難く腰黒ト軒人も其人ア射向事たやすら祐也自然
よ夭寿も常般石代萬年の長くまさかく貪窮も大船の豊ルく樂
家内ふ事取く父母夫妻子孫兄弟も亦和として穏くとぞ有経べき
故半受賣命比宮風の御靈を朝夕に祈願白く偏屋よ頑魯なる心
を和光心を延すむ折くもあらうきうひて樂きが金りよ舞樂の業
とむを除きを能の相狂言てふとのうとも今比せり御所謂茶番などり
つまをとぞ舞り巧も出だべりもかくこそ比の神比仰心より食ひ
天照大御神も岩戸隠り文朝ふけふ樂とわらひ八百万神ともも
皆昔よ歎び聞く御稟威を幸恩頼を蒙施へしあひなむら殿樂
り於面白

文政九年四月十五日

蘿蔭園比稿

源重恭記

重恭敬く氣吹廻屋の垣内カキツに入りて常小宮比神を拜齋ヨリミき猿樂ヨガニイツ等
化されたる陰を好むまふ今世は専ら饗モチアツふ免當茶番モクタウサバと業を
古代の俳優ワザヨウすもや通ひたるかあく見ゆをいそぞ正ヨリドウ典ヨウジン如も
ぞらと物すむ暇フリ見出ハシメルは小手コキ紙比端ハシタケ記メモ試もよみ
うれきのふなり教マテルふ戯業ワガサヤを事ハシメルげふ書ハシメルお詫ハシメル
いと嗚呼アホ猿ヤマネが拂ハシメルと見る人ヒトを笑ハスルいあもよばせ猿
失ハシメルけるも猿業ワガサヤ比平生ハシメルたゞ物モノと思ハシメル上アゲルて
酒サケのまゝ五章ゴジョウ一所ハシメルをなほの猿ヤマネを似ハシメル見ハシメルを行ハシメルも
ともいひあへう

引用書目

- 古車記
延喜式
日本書紀
續日本紀
舊車紀
貞觀儀式
古語拾遺
三代實錄

- 本朝月令
大鏡
古車談
吾妻鏡
源平盛衰記
海人藻芥
承ハシメルさ先ハシメルの記
北山殿行幸記
洛陽田樂記
栗田口勸進猿樂記
山王祭禮記
太閣記
常陸國誌
風俗文選
月能桂
老人雜話
和漢三大圖會
梅窓筆記
和車始
- 西宮記
榮花物語
宇治拾遺
增鏡
禁祕御抄
尺素往來
源氏物語
七十一番職人盡歌合
新猿樂記
紅河原勸進猿樂日記
翰林胡蘆集
近代世車談綺
文安田樂能記
御ゆよ上社日記
庭訓往來
参考太平記
同弄花抄
枕草絆
江次第
本朝文粹
うけろ日記
今昔物語旧本
十訓抄
沙石集
参考平治物語
義經記
拾芥抄
下學集
参考太平記
枕草絆

閑田耕筆

剪燈新話

通計六十部

西京雜記

事物紀原

干時明治十九年初冬

妻木賴德



